

## 〔書評と紹介〕

青森県環境生活部県史編さん室編

# 『馬淵川流域の民俗』

大島 建彦

青森県史編纂の民俗部会では、『青森県史』民俗編の編纂にむかつて、地域別の民俗調査を進めてきたが、その最初の報告書として、『馬淵川流域の民俗』をまとめて刊行した。総説にあたる小池淳一氏の「馬淵川流域の民俗の地域性と歴史性」につづけて、小熊健氏の「社会構成」、昆政明・成田敏・村上直人三氏の「生業」、三浦貞栄治・大嶋一人・御船達雄三氏の「衣食住」、豊島秀範氏の「人生儀礼」、外崎純一氏の「年中行事」、大湯卓二氏の「信仰」、門屋光昭氏の「民俗芸能」、佐々木達司・小野寺節子両氏の「口承文芸」というように、民俗の分野ごとに八つの章をもうけており、付録資料として小井田幸哉氏編の『大銀杏』および『大銀杏』二号を収めている。そこでは、これまでの分類の枠組を用いたのも、できるだけ民俗の実態から離れないで、さまざまな生活の面にわたって、多くの貴重な資料を取りあげるためには、かえって有効な結果をもたらしたのではないかとみられる。A4判の本文三三七ページ、報告書ではあるが、まさに質量ともに充実感にあふれているといえよう。

この表題の「馬淵川流域」というのは、青森県の南部地方の南半分にあたる、八戸市および三戸郡の全域を含むものとして用いられている。

そのような調査の地域の設定にも、この民俗部会のメンバーの意欲をうかがうことができる。もともと、これまでの民俗調査の中にも、昭和三年から同四年にかけて、東京教育大学の関係者によっておこなわれた、一聯の民俗総合調査などのように、ただ一つのムラだけにとどまらないで、いつそうひろい範囲にわたって、その歴史性と地域性をさぐりながら、各地の民俗の実態と取りくむ試みがなかったわけではない。それにもかかわらず、本書の小池氏の総説に説かれたように、「従来の地域民俗学が、地域を名乗りながら、ともすれば単独のムラの範囲で調査を限定してしまう弊害を意識し、民俗事象の領域ごとに、必要があれば、多様な『地域』をフィールドとして調査研究を遂行することを意識した」というのである。それによって、幅ひろい生活圏にわたる民俗を取りあげるのに、著しい成果をあげたにはちがいないが、必要に応じて、それぞれの集落ごとの民俗をとらえるのに、いささかの不満をのこしたことがあったかもしれない。

一般に今回の調査地は、おおむね畑作中心の地域として知られるが、川沿いに水田の稲作もいとなまれるほかに、本書の「生業」の章に示されたような、焼畑の耕作、果樹の栽培、馬の飼育、養蚕、山仕事、炭焼き、狩猟、川漁、ダゼンツケ、シヨイコ、ウルシカギなどという、生産や交通・交易のいとなみがあげられるのであって、さらに「生業の民具」の項に示されたような、ブドウツルやマダなどの木の皮の採取、「副食物」の項に示されたような、山菜やキノコや木の実の採取も加えられるであろう。実際に馬淵川の流域にいとままれた、そのような多様な生業が、それぞれの集落の地域性に応じて、どのように組みあわされ

ておこなわれているのか、またそのほかの分野の民俗とも、どのようにかわりあって伝えられてきたのか、いつそうこまかな具体例を示していただきたかったように思われる。

「生業」の「畑作」の項には、畑の主要な作物について、「一年目の春にヒエを蒔いて秋に刈ると、その後にムギを蒔いて冬を越す。二年目の春にはムギの脇にマメを蒔いた。七月にムギを刈り、秋にマメを刈った。翌年の春にまたヒエ蒔きから始まる」というように、二年ごとに同じようにくり返されるということが示されている。また、「生業」の「焼畑」の項には、「アラギオコシの後はいいてい植林を行い、スギだと三〇〜四〇年後に伐採し、アラギオコシと植林が繰り返して行われた」とか、「アラギオコシの畑には、肥料をやらず、三〜五年作物を栽培した」とか、「集落の共有地でアラギを行った場合、そうした場所はやがてカヤ野になった」とか、「カヤ屋根の耐用年数は四〇年ぐらいで、材料を吟味して行くと八〇年ぐらいは大丈夫であった」とかいうようにしるされている。通常の稲作の仕事が一年周期でとらえられるのに対して、そのような生活のいとなみが、二年または三年単位でとらえられ、三〇年または四〇年単位でとらえられたということが、住民の人生観や価値観にとつて、どれだけ大きな意味をもっていたのか、改めてよく考えてみなければならないであろう。

本書の小池氏の総説にもふれられたように、今回の年中行事の調査では、「いろいろの裸廻り」の事例は認められなかったが、昭和二十一年の『大銀杏』における、石塚建一氏の「田植の行事」には、「小正月の十六日に或人が或村を通りかかった時家の中で夫が禰をあてず妻は腰巻な

してワキ穂出ると叫びながら家の中を廻って歩いて居ったさうです。そこでその人は笑ひながら見て居ったさうですがその人も真面目な顔して家に入り着物を脱いで禰を取って三人ワキ穂出ると叫んで歩いたさうです」などとするされている。各地の裸廻りの唱えごとには、たいがい粟や稗があらわれてくるので、これまでの民俗学の研究では、もともと畑作とかかわるものとして認められている。それだけではなく、この裸廻りの報告にさきだつて、「田植する時父が禰をあてず母は腰巻なして田植すると稔りがよい」としるされていたのが注目される。本来は畑作の儀礼に属していたものが、しだいに稲作の作業にもとりいれられたと考えられるからである。

もともと稲作だけに頼ることができない生活は、外の社会とかかわりあわなくてはなりたたなかったといえよう。「生業」の「交換」の項には、八戸の浜の人との間で、イワシとマメとを交換したのをはじめ、五戸や三本木などには、野菜などを売りにいって、家具などを買いにいったことが示されている。青森県三戸郡から岩手県二戸郡にかけては、あきらかに一つの商業圏がかたちづくられており、田子の十日市のような定期市には、きまつて市掛けに歩くものがすくなくなかったということである。「信仰」の「蒼前信仰」の項には、上北郡下田町木下の気比神社などに、馬を飼う家々から参詣にいつており、その神社の別当などが祈禱にきていたとしるされ、また「遠隔地信仰」の項には、はるかに山形県庄内地方の出羽三山までも、先達に連れられて山かけに参つており、その宿坊の御師がお札配りや祈禱にきていたとしるされている。「民俗芸能」の「村に來た芸能・芸人」の項には、根渡の人形芝居、田子の獅

子舞などが、この近辺をまわってあるいたとするされており、この地域における人間の交流は、さまざまな生活の面にわたっていたと知られる。

そのようにひろい範囲にわたって、これだけ多くの資料を集めると、そのような伝承の検討を通じて、それぞれの民俗の位置づけを試みることもできそうである。たとえば「社会構成」におけるホンケとカマドとの関係、「衣食住」におけるカデメシや粉食の慣習、「信仰」における一族や家の屋敷神の祭祀、あるいは家のオシラサマの伝承などについて、それぞれさまざまな段階に属するものがあげられており、ひととおりその展開のあとを示しているように思われる。それにしても、現に青森県南の地域には、もっぱらマタギとしてくらしした人も、みずからオハグロをつけた人も、ほとんど生きのこつてはいないことにふれておきたい。全体にこの調査の報告も、おおむね昭和以降の資料にかたよつてはいるが、著しい激動の時代を経ているだけに、やはり貴重な記録として認められるであろう。「口承文芸」の章には、七二話の昔話と三三話の伝説と五一話の世間話とが、いくつかの早物語やなぞなぞやことわざなどとともに収められている。能田多代子氏の『手つきり姉さま』などくらべると、かならずしもととのつていない伝承もまじえてはいるが、今日の伝承の状況をかえりみると、むしろ相当な成果をあげたものであるといえよう。

いずれにしても、この新刊の『馬淵川流域の民俗』は、青森県の民俗を知るだけでなく、日本の民俗を考えるためにも、きわめて大きな意味をもつものであるといつてよい。あえていうと、誤字や誤記などが気

にかからないこともないが、それにもかかわらず、その豊富な内容にひきつけられて、この一冊の報告書を読みとおしてしまった。それによつて、嫁の里帰りの慣行、神々の年取りの行事、餅や団子の食習、子安さまの信仰、石の占いの俗信など、かねて私の関心をもっていたテーマについても、多くの新しい資料を加えることができた。そういうわけで、『青森県史』民俗編の完成まで、県内各地の民俗調査の成果には、きわめて大きな期待をかけているのである。

（青森県刊 A4判 三三七頁 一九九九年三月刊）

（おおしま・たてひこ 東洋大学文学部教授）